



TITLE:

京大広報 No. 169

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 169. 京大広報 1978, 169: 855-860

ISSUE DATE:

1978-12-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209519>

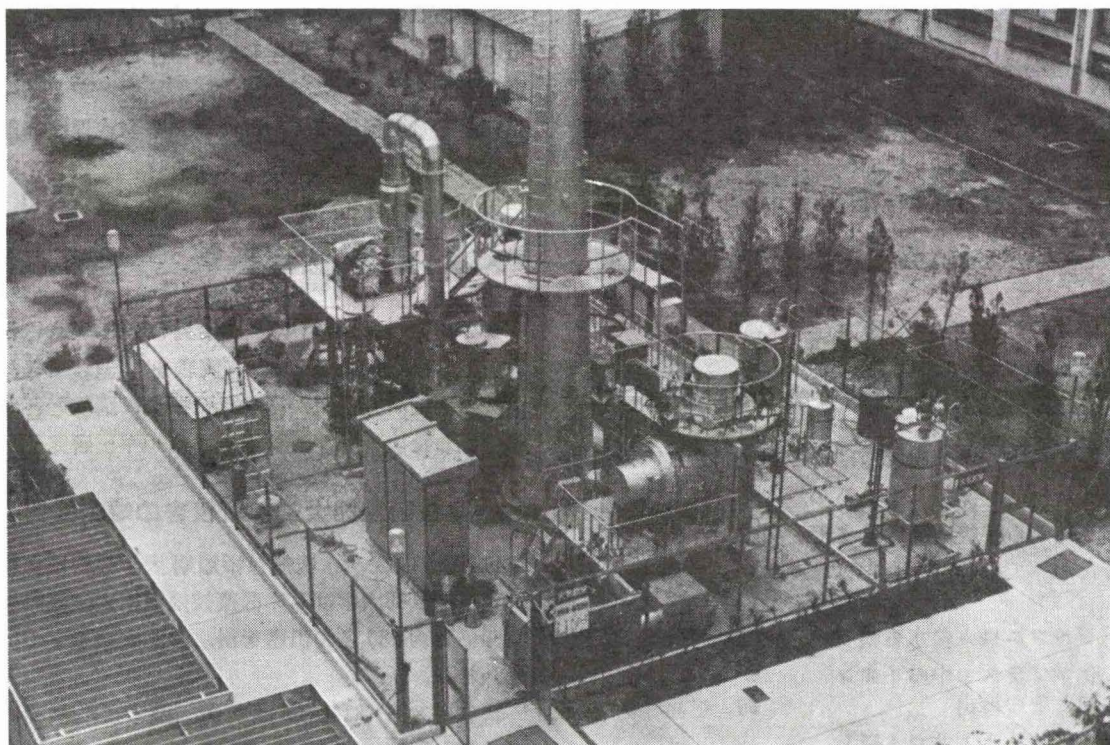
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

# 京大広報

No. 169

京都大学広報委員会



有機廃液処理装置 (KYS)

昭和49年末、本部構内工学部四号館中庭に設置され、有機廃液の焼却処理が行なわれている。—関連記事本文4ページ—

## 目 次

12月6日の掲示……………	2	<紹介>	
総長、12月18日から東南アジアの大学等を訪問……………	2	環境保全センター……………	4
原子エネルギー研究所公開講演会……………	2	<随想>	
医療技術短期大学部新校舎の竣工式典……………	2	京大とその後の事ども	
宇治地区自衛消防団……………	3	名誉教授 小松 醇郎……………	5
		日 誌……………	6

## ＜大学の動き＞

## 12月6日の掲示

総長は最近の学内の事態にかんがみ、12月6日、次の掲示を出した。

(掲示第5号)

最近学内において教官に対して長時間にわたるいわゆる団交を強要し、暴力的行為に及ぶといったことが相ついでいる。

このような行為は、容認することはできない。厳重に警告する。

昭和53年12月6日

京都大学総長 岡 本 道 雄

### 総長、12月18日から東南アジアの大学等を訪問

岡本総長は、来る12月18日東南アジア諸国に向

け出発する。出張期間は2週間の予定である。訪問先はフィリピン、インドネシア、シンガポール、マレーシア、タイの6か国の大学、研究所および文部省等であり、その間、それら施設の教育研究活動の状況を視察するとともに留学生問題ならびに学術研究の国際交流に関して関係責任者と意見交換を行なう。

なお、バンコク(タイ)とジャカルタ(インドネシア)には、東南アジア研究センターの連絡事務所があるので、これらを訪れるとともにこの両市において、本学に留学した留学生との交歓を予定している。

12月30日の帰国までの間、総長事務代理は蜂屋慶教育学部長が当たる予定である。

## ＜部局の動き＞

## 原子エネルギー研究所公開講演会

原子エネルギー研究所はその創立記念日に毎年公開講演会を開催しているが、本年も11月28日午前9時から午後4時20分まで、次のプログラムにしたがって公開講演会を行なった。

ジルコニウムの水素吸収	内藤 静雄
化学プラズマ中のイオン種とその析出	鈎 三郎
高温液体ナトリウムにおける沸騰実験の概要	桜井 彰
トカマク核融合炉におけるアルファ粒子	大西 正視
光子相関 LDV によるエアロゾル流れの測定	伊藤 正行
中・高エネルギー領域における核分裂	今西 信嗣
超新星内層殻における原子核合成	大西 輝明

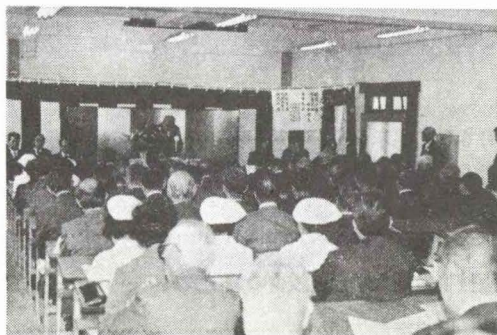
なお、当日高温液体ナトリウム伝熱実験装置が公開された。本装置は、ナトリウム冷却高速中性子炉の安全性に関連する高温液体ナトリウム沸騰現象を基礎的に研究するものであり、昭和45年度

および48年度文部省特別設備費を基に設置された。その後改良を重ねつつ実験を実施してきたが、重要な研究成果が得られた機会に講演とともに公開した。(原子エネルギー研究所)

## 医療技術短期大学部新校舎の竣工式典

11月22日(水)、医療技術短期大学部新校舎竣工式典が京都大学はじめ医療技術短期大学部内外の関係者約130名の出席を得、一階大講義室で行なわれた。

式典は、午前11時に始まり、岡本道雄学長の「立派な環境に恵まれ、市民に信頼される人材養成に力を尽くしたい」との挨拶に続いて、佐々木輝幸京都府衛生部長、中沢輝郎京都市衛生局長な





らびに菅原 努医学部長、西村敏雄医学部附属病院長からの祝辞があり、祝電披露ののち、新校舎の建設に当たった株式会社浅沼組に感謝状が贈呈され11時40分終了した。

引き続き出席者の施設見学が行なわれたのち、京都教育文化センターにおいて、12時20分から竣工祝賀パーティーが開かれた。

医療技術者の養成は、従来主として、看護学校、助産婦学校、臨床検査技師学校等各種学校において行なわれてきた。しかし、従来の教育体制では、近年における医療技術の急速な進歩に対応する教育の成果を期待することが困難であり、より高度な知識と技量を身に付けた専門技術者を養成する機関の設置充実の必要性が広く社会的要請となった。

この要請に 応えるため、国の施策の一環として、医療技術系の教育施設が附設されている国立大学に、年次計画をもって併設医療技術短期大学部を設置する措置が講ぜられ、昭和50年4月22日付けで国立学校設置法の一部が改正され、「京都大学医療技術短期大学部」が京都大学に併設され

たのである。

初年度の昭和50年4月に発足したのは、看護学科（学生定員80名・3年制）と専攻科助産学特別専攻（学生定員20名・1年制）であったが、翌51年4月には衛生技術学科（学生定員40名・3年制）が増設された。

新校舎は、医学部附属病院旧眼科外来病舎跡に建設され、主として看護学科、専攻科助産学特別専攻が使用する第一期新築工事が昭和50年7月に着工し、52年8月完成、ついで既に同年6月から始まっていた主として衛生技術学科が使用する第二期新築工事が53年3月に完成し、8月には諸設備が整った。

新校舎は、鉄筋コンクリート4階、地下1階延べ5,484 m<sup>2</sup>。総工費6億3,600万円である。

新校舎が完成し移転するまでの間の医療技術短期大学部の教育は、主に医学部および医学部附属病院の教室や講堂等を借用して行なわれていた。ここにそのご協力、ご支援に対して改めて厚くお礼申し上げる次第である。

（医療技術短期大学部）

### 宇治地区自衛消防団

本学宇治地区には、昭和43年10月以来自衛消防団が置かれている。宇治地区周辺（そのほとんどが宇治職員宿舎）に居住する職員の中から総長の委嘱を受けた、現在27名の団員（団長 鈴木強技官）で組織している。宇治地区における火災その他の変災発生に際し、被害を最小限にとどめるため、いち早く消火、警備誘導連絡、危険物処理、救助および非常持出に当る。宇治地区自衛消防団の出動を必要とするときは、まず門衛所（内線455）へ連絡されたい。消防団非常時連絡網は完備しており、またサイレンが吹鳴される。連絡の際は発生場所、概要（爆発のおそれの有無等）を簡明に伝えてほしい。

宇治地区自衛消防団の装備は、消防ポンプ自動車（トヨタランドクルーザ総排気量3,878cc）1台、ホース（6.5cm×20m）10本、筒先2本、鳶口2本であり、ポンプ自動車は毎分2,650立方メートル放水の性能をもっている。このほか、往年本部地区において活躍した1926年式シボレー消防車



（2,800cc）1台が、本学の消防の歴史を飾るものとして保存されている。

自衛消防団は、有事に備えて日頃から厳しい構内防火訓練に取り組んでいる。装備の点検、操作や放水実地訓練に励む団員の、口々から発する「よしッ」という確認の掛け声ときびきびとした動作は、実に勇ましいものである。

毎年11月初旬には、宇治自衛消防隊連絡協議会主催の消防訓練大会がユニチカ宇治工場グラウンドで開かれる。自衛隊はじめ約50事業所の消防団

(隊)が参加し、ビーチボール、回転ボール、オイルパンの火等を標的として屋内・屋外消火栓操法、消防自動車ポンプ操法、消火器取扱い操法を競う。我が京都大学宇治地区自衛消防団もポンプ自動車を乗り入れ参加、日頃の訓練の成果を遺憾なく披露し、京都大学自然科学系研究諸施設を守る自衛消防団として高く評価され、宇治消防署から優秀と折紙をつけられている。

年末には訓練の総仕上げとして年末特別消防演習を本館玄関前で実施する。出火場所を仮定して

消防ポンプ車が出動する一方、屋内、屋外消火栓からも一齐放水、薬玉が割れて「火の用心」の垂れ幕が下がり、一年間の幕を閉じる。

宇治地区における本年の火災発生は一件もなく、実際活動の場はなかったが、これも職員各位の防火意識が向上したたまものと感謝している。火災の発生しやすい冬季を迎え、今後も引き続き研究室や宿舎における火気の取扱いには十分留意されるようご協力を切に願います。

(宇治地区自衛消防団)

## ＜紹介＞

### 環境保全センター

本センターが学内共同施設の一つとして設立されたのは、昭和52年4月であった。設立に至るまでの経過と設立の趣旨については、すでに紹介したので(広報No. 140, 1977.5.15)、ここには、その後の活動状況について報告したいと思う。

センターは、発足と同時に有機廃液処理装置(KYS)の維持・管理業務を引き継いだ。この装置を用いて有機廃液を焼却処理することが現在の最も主要な業務となっている。焼却処理は「廃液の排出者が自らの手で行なう」ことを原則として、各部局の指導員の指導のもとに行なわれている。指導員の養成もセンターの重要な仕事のひとつであるが、センターが実施する講習および試験を受けて指導員の資格を得た方は、すでに300名に達しようとしている。KYSが運転開始以来3年間にわたって幸い無事故で順調に稼働できたのは、指導員の皆さんのご尽力に負うところが大きい。

KYSの利用部局は、理学部、医学部と附属病院、薬学部、工学部、農学部、教養部、宇治地区研究所などであり、年間2万リットル近い有機廃液が排出される。その大部分は、有機溶剤であるが、中にはフェノールやピクリン酸などの希薄水溶液もある。これらの水溶液も、本年度から処理可能になっている。各部局の利用日程は、センターの運営委員会で決定し、装置の維持・管理と利用に関する事務とは、センターの職員が行なっている。

KYSにとって最大の問題点は、ハロゲンを含む溶剤の焼却のために、主要部分が次々に腐食し、

その点検と修理に多くの人手と経費を要することである。センターの定員は、今でも助教授と技官1名ずつであるので、山積する問題をかかえて四苦八苦しているのが実情である。KYSの部局ごとの利用状況については、近く刊行を予定している『環境保全センターニュース』に記載したいと思っているので、ご覧いただければ幸いである。

次に本センターの研究活動についてであるが、本学内に大量に貯留保管されている実験室廃棄物(重金属塩類やためすの沈泥)の処理が急務となっていることもあって、それら廃棄物のコンクリート固化処理および焼結処理について研究している。

一方、教育活動としては、高月助教授が工学部衛生工学科の「都市・産業廃棄物処理」を講義するほか、工学部化学系2年生を対象とする「環境保全概論」の一部を分担している。

本センターががいだいている将来計画の中で、最も急を要するのは重金属塩処理装置の設置であろう。目下、この装置の昭和54年度完成をめざして具体的な検討を進めている。もしこれが実現すれば、無機系廃液の処理も実施できるわけで、全国的にみて著しく遅れている本学の廃棄物処理体制は大きく前進することになる。

しかし、問題はそれだけでなく、実験排水系の整備、将来の水不足に備えるための中水計画、固形廃棄物の処理等々、とどまるところを知らない。

下水一つを例にあげても、規制は年々厳しさを増しつつある中で、本学の環境保全はセンターの努力だけでは、どうにもならない現状である。全学の皆さんの深いご理解とたえざるご協力を切望する次第である。(環境保全センター)



## 日 誌

(1978年11月1日～11月30日)

- |       |                        |     |                                    |
|-------|------------------------|-----|------------------------------------|
| 11月4日 | 農学部附属農場創立50周年記念式       | 15日 | 国際交流委員会                            |
| 7日    | 基礎物理学研究所創立25周年記念式      | 18日 | 名誉教授懇談会                            |
| 〃     | 安全委員会                  | 20日 | 環境保全委員会                            |
| 9日    | 人文科学研究所公開講演会           | 〃   | ソビエト連邦共和国モスクワ国立大学アジア               |
| 10日   | 食糧科学研究所講演会             |     | アフリカ諸国大学助教授 Kotova Antonina        |
| 〃     | 基礎物理学研究所公開講演会（同研究所）    |     | Fedorovna 氏および同講師 Korchagina       |
| 13日   | 内発文化の知的創造性に関するアジア・シン   |     | Tatijana Ivanovna 氏来学              |
|       | ポジウム（於国立京都国際会議場および京大   | 21日 | 創立70周年記念後援会助成金選考委員会                |
|       | 会館、国連大学・京都大学共催、11月17日ま | 22日 | 医療技術短期大学部新校舎竣工式                    |
|       | で）                     | 24日 | ソビエト連邦共和国ソ連科学アカデミー東洋               |
| 〃     | 基礎物理学研究所公開講演会（於東京 日仏   |     | 研究所研究員 Georgi Georgievich Sviridov |
|       | 会館）                    |     | 氏来学                                |
| 14日   | 評議会                    | 25日 | 学位授与式                              |
| 〃     | 建築委員会                  | 28日 | 原子エネルギー研究所公開講演会                    |
| 〃     | 昭和53年度大学図書館職員講習会（文部省・  | 30日 | 韓国ユネスコ国内委員会事務局職員 Chang-            |
|       | 京都大学附属図書館共催、11月17日まで）  |     | Myung Park 氏外2名来学                  |

~~~~~